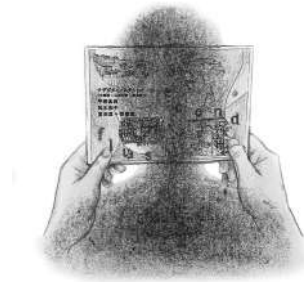


信頼できない語り手



信頼できない語り手 (Unreliable narrator) とは

小説や映画、劇などで用いられる手法であり、前提条件として提示される文章は地の分や形式において無批判に鵜呑みにしていいという認識を逆手にとった叙述トリック。(注1) 読者自身は、物語の語り手はそこで起こったありのままの真実を語るものだと最初認識しているが、物語の語り手が語る内容が実は真実と異なり、読者を惑わせミスリードする。

注1: 小説という形式自体が持つ暗黙の前提や、偏見を利用したトリック。

○今日のアートツアーでは、この叙述トリックを美術館のフォーマットへ置き換えてみます。

一人称の語り手は「信頼できない語り手」です。作家は主観で話すため、作品にとって一番の「信頼できない語り手」であるといえます。では、展示室にある、挨拶文、ハンドアウトや展示室内の三人称で語られる文章が「信頼できない語り手」によるものとしたら、作品の捉え方はどう変化するでしょうか。"人間は日常的に触れる情報のうち8割を視覚から得ている"といえます。8割のうち作品にとっての真実をどれほど受け取れているのでしょうか？

ナンヤローネアートツアー「信頼できない語り手」の始め方

1. 自らが”信頼できない語り手であることを自覚しましょう
2. フィクションであることを保留し受け入れましょう
3. 誤読行為を楽しみましょう

<アートツアーの手順>

- ① 今ある作品情報の一切を無視し、事実と異なるとんでもない設定を作品に組み込み、その考えをハンドアウトに書き込みます。(お渡しするハンドアウトは、作品情報部分が空白になっています。)
- ② できあがった「信頼できない語り手」によるハンドアウトを、他の参加者に渡します。
- ③ 「信頼できない語り手」である他者が作ったハンドアウトを元に、もう一度展示室で作品鑑賞します。
- ④ 最後にハンドアウトを作ったグループの作品設定を聞き、そのハンドアウトを見ながら作品鑑賞したグループの感想を聞きます。
- ⑤ 困った時は美術館の皆さんに作品について聞いてみましょう。しかし彼らもまた「信頼できる語り手」とは限りません。

誰か他の人を騙したり、嘘を暴いたり、問いを解くことが目的ではありません。展示室で与えられた情報を信頼しないと、作品の関連情報から自由になり、別の視点を(なかば強制的に)持つこと、そうすることで作品解釈の幅を広げること、作者さえ知り得ない作品の新しい見方を発見することが目的です。作者ではなく、作品の前に立った誰もが、作品自身が信頼できる語り手になることができます。作品と自分だけの関係をつくり、誤読行為を楽しみましょう。それが作品にとっての真実かもしれません。

『青白い炎』ウラジーミル・ナボコフ著、1962年発行

架空の詩人ジョン・フランシス・シェイドによる瞑想詩『青白い炎』と、その詩の膨大な注釈と索引からなる"小説"。注釈者はシェイドと同じ大学に勤め、シェイドの隣人でもあるキンボート。詩の完成後シェイドが亡くなりキンボートが詩の注釈と編集、出版を名乗り出るが、キンボートによる注釈は詩の内容から大きく逸脱・脱線し、彼の奇怪な幻想や妄想によって歪められている。シェイドに妄執し、詩の内容に無関係の自らの人生を無理やりこじつけようとするキンボートにとってその「誤読行為」は、特別なリアリティを想像することに他ならない。“そうした別世界(それは異界への関心とも通じる)の創造を通じて得られる美的至福が、深い喪失感から生じる恐るべき孤独と苦悩の現在を少しでもやわらば、軽減してくれるのではないかと希求する。(略)そんなとき、彼が狂人であるなどということはほとんど問題ではなくなり、彼を通じて、われわれはしばしば創造者や芸術家の姿を垣間見ることになるのだ。言い換えれば、キンボートの幻想や妄想は明らかに文学的想像力の別名なのである。”

(ウラジーミル・ナボコフ『青白い炎』ちくま文庫、2003年、訳者あとがきより抜粋)